

研究ノート

## 李光洙の『民族改造論』とギュスターヴ・ル・ボンの『民族進化の心理学的法則』

Yi Gwang-su's « Reformation of Nation » and Gustave Le Bon's  
« Les Lois psychologiques d'évolution des Peuples »

波田野節子\*

HATANO Setsuko

### 1 はじめに

1922年の『開闢』5月号に発表した「民族改造論」のなかで李光洙はギュスターヴ・ル・ボン (Gustave Le Bon) の著作『民族の心理学』の一説を引用し、その学説に依拠して民族改造の方法を説明している。このとき李光洙が参考にしたのは1910年に大日本文明協会が刊行した日語訳だった<sup>1</sup>。しかし日本では、その10年前の1900年にも一度、ル・ボンのこの著書が紹介されている。本稿では、1900年と1910年の日本においてル・ボンがどのように受容されたか、そして李光洙はル・ボンの学説とどのように向き合ったかを考察する。

### 2 ギュスターヴ・ル・ボンについて

ギュスターヴ・ル・ボンは1841年にフランスのウール・エ・ロワール (Eure-et-Loir) 県の名門に生まれ、トゥールの中学校を卒業した<sup>2</sup>。パリの医科大学に学んで1866年に医師となり、1870年の普仏戦争のときは野戦病院で勤務している。彼の関心は広範にわたっており、ヨーロッパ、北アフリカ、オリエントを旅行した紀行文や、『アラビア人の文明』(1884) 『インドの文明』(1887) などの文明論のほかに、医学、衛生学、生理学、歴史、心理学、物理

---

\*新潟県立大学国際地域学部 (hatanos@uni.ac.jp)

本稿は、2010年6月5日に慶熙大学国際キャンパスで開催された国際学会「近代東アジアの『韓国人』認識」で行なった招請発表の日本語原稿の第4章を大幅に修正したものである。

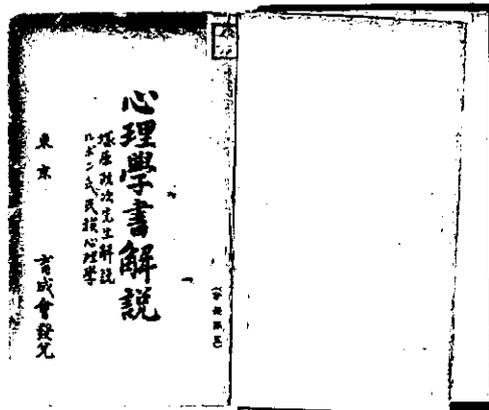
学など、その著書は40冊近くにのぼる。彼の名を世界的に高めたのは、1894年に刊行した『Les Lois psychologiques d'évolution des Peuples (民族進化の心理学的法則)』とその翌年の『群衆の心理学 (Psychologie des Fouls)』であった。とくに後者は刊行の翌年にはアメリカのMacmillan社から『Crowd: A Study of the Popular Mind (群衆：大衆心理の研究)』というタイトルで英訳され、ギュスターヴ・ル・ボンの名は「群衆の時代」という言葉とともに世界に広まった。この書はムッソリーニ、ヒットラー、シャルル・ド・ゴール、ルーズベルトなど、世界の政治家たちの必読書となったという。

ル・ボンの思想の根底には人間は本来不平等であるという考え方がある。彼は「17世紀のフランスで生まれた自由と平等の思想」(ルソーの思想をさすとされる)は誤った思想であるにもかかわらず、民衆に浸透して破壊的な「奔流」となり、いまでは誰もその勢いをとどめることはできなくなったと考えていた。そして民衆の行動が歴史を決するようになったこの時代を「群衆の時代」と呼び、思想が民衆のなかに広まってついには彼らを動かすようになる過程を『民族進化の心理学的法則』で分析した。

当時のヨーロッパではほぼ常識だった社会進化論の信奉者として、彼は民族を進化の程度により4等級に区分している。ヨーロッパ人が属す「優等人種」、中国人、日本人、蒙古人らが属す「中等人種」、黒人が属す「劣等人種」そして石器時代に近い生活を送る「原始的人種」である。ル・ボンによれば、民族の差異は知識においてではなく性格にある。どの民族も核となる心的な組織を持っており、歴史、文明、制度、芸術などはすべてこの特性から生み出されるのであって、一つの民族の文明を他の民族に移植することは不可能なのである。民族の特性は人間の内部に無意識の性格として存在し、その上部に教育などによって作られた知能や個性などの意識的かつ可変的な性格がある。人間はふだん意識的な性格によって行動しているが、集団として行動するとき、精神の奥底にある無意識の共通の性格があらわれて全体を支配することがあるとして、ル・ボンはこの心理を「群衆心理」と呼んだ。ル・ボンにとっての「群衆」とは基本的に「愚民」だった。パリに近い地方の名門出身だったル・ボンの脳裏には、彼が生まれる半世紀前に民衆がフランス革命で演じた行動に対する恐怖心があり、それが群衆心理の分析につながったとも言われている。第二次世界大戦後には人権思想によって社会進化論は否定され、彼の名前もほとんど忘れられたが、「群衆心理」という語や「死者が生者を動かす」などの言葉はいまも人口に膾炙している。

### 3 塚原政次の『心理学書解説 ルボン氏民族心理学』(1900)

1900年にル・ボンの『民族進化の心理学的法則』をはじめて日本に紹介したのは、当時28歳の東京大学大学院生塚原政次<sup>つかはらまさつぐ</sup>(1872~1946)だった。主として教育と倫理に関する雑誌や書籍を刊行していた育成会の「心理学書解説」第五巻を担当して、『心理学書解説 ルボン氏民族心理学』<sup>3</sup>を書いたのである。塚原はこの翌年に米国とドイツに国費留学し、帰国後は東京高等学校長や広島文理科大学長を歴任して、日本の教育心理学の創始者の一人となった人物である<sup>4</sup>。



塚原政次の『ルボン氏民族心理学』表紙  
国会図書館 近代デジタルライブラリー

彼が解説をしたのは、1898年にアメリカのMacmillan社から刊行されたル・ボンの『The Psychology of Peoples Its Influence on Their Evolution (民族心理学 民族進化におけるその影響)』<sup>5</sup>という本である。これには翻訳者の名前も原著者の序文もついていなかったため、塚原は、フランスの『科学評論』に掲載されたル・ボンの論文を順序立てして英訳したものだろうと考えていた<sup>6</sup>。緒言にあるル・ボンの著書リストには、仏タイトルのついた『民族進化の心理学的法則 Les Lois psychologiques d'évolution des Peuples』と英タイトルのついた『民族心理学 The Psychology of peoples』と、2つが並んで挙げられているところから見て、どうやら塚原は後者が前者の英訳本であることに気づかないまま解説をしたようである。

「一、緒言」で塚原は、ル・ボンがフランスの有力雑誌に論文を多数発表して数々の書物に引用されている有名な学者であること、最近とくに『群集の心理』という本が話題になっていることを述べ、「民族心理学とは社会心理学の

一部であって、民族と称する特殊の社会の精神を研究する学問である」と説明している。「二、目次」は原典の目次の引き写し、「三、梗概」は章の順序にそった内容の解説で、最後の「四、批評」で、塚原はこの書物に対する批評を行なっている。彼はまず読者に対して、民族心理学のような学問においては著者の出身国に留意する必要があることに注意を喚起し、ル・ボンはフランス人であるからドイツ人学者とは違う見解になるであろうと述べる。次に、ル・ボンが「race（人種）」と「people（民族）」の用語を混用していることを指摘してから、ル・ボンがこの本で述べていることについて自分が賛成できるものとできないものに分けて、その理由を説明していく。

ル・ボンが民族の心理的特性を「根本的特性」と「付属的特性」に分け、前者がほとんど不変で後者は教育などによって変更しうるとしていることに対して、塚原は、教育によって知識が発達すればやはり民族的性格も変わりうるはずだと反論する。彼がのちに教育家としての人生を歩んだことを考えれば当然の主張であろう。だがル・ボンが人種を階層づけしていることは当然のこととして受け入れ、単に日本人を「中等」に入れた点だけを問題視していることにより、彼が生きた時代の空気が感じられる。これが当時としては一般的な考え方だったのである。とはいえ次のような記述に対して塚原は不快を隠していない。

一人の黒奴、若しくは一人の日本人は容易く大学の学位を得ることが出来るし、又法律家となることも出来る。併しながら彼等の得るところのものは畢竟皮相的である。そうしてその精神組織の上には何等の影響をも有たない。彼らは遺伝のみに依って作られて居るからして、如何に教育しても思想の形、就中西洋人の性格を与えることは出来ない。固より黒奴でも、日本人でも、普通十年くらいで謳羅巴人の知識を得ることが出来る。併しながら真の謳羅巴人となるには千年と雖も未だ不十分であろう。（第一編 第三章 人種の心理的特権）<sup>8</sup>

ル・ボンの言うとおりに我われ日本人は千年たっても英国人のようにはなれないことになる」と述べて、塚原は、自分としては著者の言を完全に否定するわけではないが、思うに、知識が民族的性格に影響を与えることができないとして知識と性格との境界を明確にしすぎたためにル・ボンはこのような誤謬に陥ったのだらうと冷静に批判し、今日の教育は単に知識の教育のみではなく性格の教育でもあると釘を刺している<sup>9</sup>。

ル・ボンのこの書が刊行された1895年は、日清戦争で日本が勝利した年であ

る。人種の階層を乱している「中等人種」日本人は驚異だったのだろう。ル・ボンは何ヶ所かで日本に言及している。そのうちの一ヶ所に対して塚原は次のように不快感をあらわにしている。

第二章において著者はふたたび大いに日本を攻撃して、日本は単に兵制その他諸制度において、たとえ欧州人に誇るも、その民族の精神には何等の変更なきを以って、只外観の美なるに止まりて、間もなく激烈なる革命によりて破壊さるるであろうなどと軽蔑している。(中略) 我邦人の性格中にも他邦人に勝るとも劣らざる性質もあるのである。しかるにそれをも深く感えずして、大早計に論断するは著者のために惜しむべきことである<sup>10</sup>。

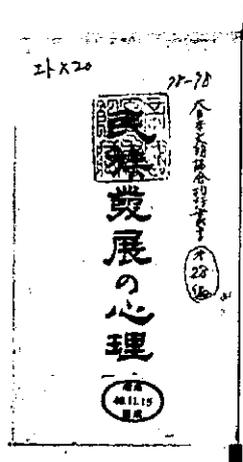
塚原がこう書いた1900年、日本は日清戦争後の三国干渉の屈辱をそそごうと、「臥薪嘗胆」をスローガンにして富国強兵を目指していた。そんな社会の雰囲気もあって、塚原はル・ボンの言葉に列強の白人の傲慢さを感じ取って憤慨したのだろう<sup>11</sup>。

このあとの民族性の変遷を分析した部分(のちに李光洙が抄訳するのは、この部分である)について、塚原は「議論は正確」だとしながらも、「著者には自分の意見に便宜な実例を挙げる傾向がある」と指摘する。そして最後に、社会的事項は自然的事項と違って原因と動機が明確でないにもかかわらず、ル・ボンが歴史上のたった数個の事実を論拠として大胆な論断を下していることに危惧と疑いを表明している。このとき塚原はまだ若い大学院生であったが、心理学研究者として学問的な姿勢をもってル・ボンを正面から「批評」した。彼の『心理学書解説 ルボン氏民族心理学』は、ル・ボンの学説を論理の整合性と研究手法の面からまじめに分析した解説書であったといえる。

#### 4. 大日本文明協会の『民族発展の心理』(1910)

1910年、大日本文明協会は、外務省翻訳官前田長太がフランス語原典から訳したル・ボンの『民族発展の心理』を刊行した<sup>12</sup>。

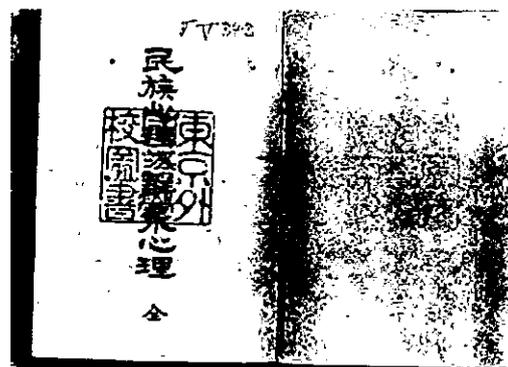
李光洙の『民族改造論』とギュスターヴ・ル・ボンの『民族進化の心理学的法則』



大日本文明協会刊行『民族発展の心理』（1910）

国会図書館 近代デジタルライブラリー

大日本文明協会とは、早稲田大学総長の大隈重信が、日本の学術文化の向上のために西洋の名著の翻訳出版が必要だと考えて、1908年に設立した会員制の協会である。このころ雑誌『太陽』の編集長でもあった早稲田大学教授の浮田和民が編集の任にあっていた。協会では同じ年にル・ボンの『群衆心理』も刊行し<sup>13</sup>、1915年にこの2冊を合本にして『民族心理及群衆心理 全』というタイトルで改版刊行する。協会の刊行物は会員だけに頒布されたが、1918年に協会はこの合本の縮刷版を出して一般に市販した<sup>14</sup>。李光洙が入手したのはこの縮刷本だったと推測される<sup>15</sup>。



大日本文明協会発行『民族心理及群衆心理 全』縮刷版（1918）

東京外国語大学図書館蔵

大日本文明協会にル・ボンの著書の出版を勧めたのは、協会の会員だったロ

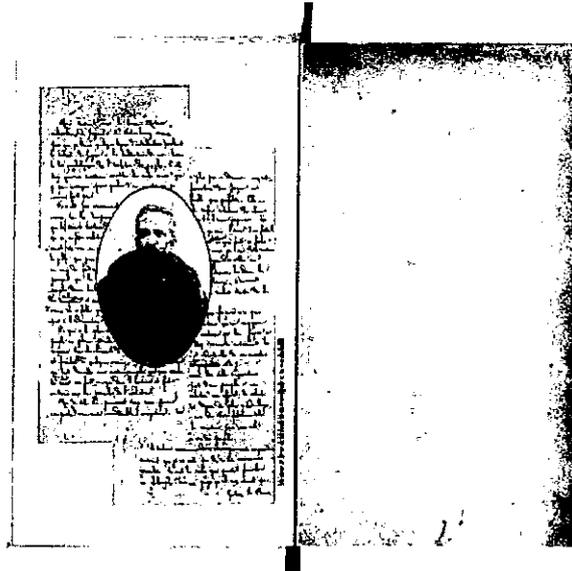
シア大使本野<sup>もとのいちろう</sup>一郎 (1862~1918) である。本野は若いときにフランスに遊学し、その後本格的に留学してパリとリヨンで法学を修めた人物である。外交官となってヨーロッパ公使を歴任、日露戦争時にはロシアで折衝の任にあたり、その功で華族に列せられた。日露協商締結に尽力し、1916年の寺内内閣で外務大臣になっている<sup>16</sup>。彼はパリの社交界でル・ボンと知り合ってその人柄に感服し、またその学説を高く評価して、一時帰国のさいに著書を持ちかえて協会に刊行を勧めたのである。刊行にあたって、彼は自ら「序」を書いた<sup>17</sup>。

塚原の『ルボン氏民族心理学』は解説書であり、『民族発展の心理』は翻訳であるが、この2書で何よりも違っているのは、前者では大塚がル・ボンが日本に言及した部分を紹介して批判したのに対し、後者ではその部分が完全に削除されていることである。実行したのは翻訳者の前田と編集長の浮田だったと思われるが、本野も削除の事実を知っていたことは、「序」でル・ボンの人種の4等級を紹介しながら、日本が「中等」に区分されていることには触れず、単に、日本人はすべての面で「優に優等人種の資格を有することを証して余りあり」と力説していることから明らかである。削除の事実を知らない日本の読者は、自分たちは「優等」に入るはずだと受けとったことだろう。この本を読んだとき、筆者自身もそう受け取ったほどである。外交官である本野にとって、ようやく日露戦争に勝利し「一等国」の仲間入りを果たしたと思っている日本国民に、いかに努力しても日本はヨーロッパには追いつけないというル・ボンの学説を伝えることは耐えられなかったのだろう。

そもそも本野は、日本にとって不利な点に関してはル・ボンの見解に反対だった。彼は「序」で、ル・ボンの学説にたいする所見を二つ述べている。一つは日本の位置づけについてであって、先述したように、彼は、すべての面において日本は優等人種の資格を有すると書いて、あえて読者の誤読を誘っている。もう一つは、民族の根本的性格は変わらないという学説への反駁である。日本は先進国の文明を取り入れることで変身をとげたと自負する彼は、民族の根本的な性格は教育によって変えることはできず、知識面での変化は付属的なものに過ぎないというル・ボンの説に納得せず、塚原政次と同じように、教育や制度によって民族性は変えられると主張する。そして、最近まで封建思想の国であった日本において、40年のあいだに平等思想と権利思想が庶民のレベルまで浸透したこと、また軍事制度の発達によって国民性が大きく変わったことを例にあげて、教育によって性格は養成できると述べている。この点について、本野はパリでル・ボン本人と何回も激論を戦わせたが、ついに意見の一致を見なかったという。「余は熱心に畏友の著書を我同胞に紹介するものなりといえ

ども、この点につきては聊か保留をなすのやむを得ざるものあり」<sup>19</sup>と彼は書いている。この「保留」が削除につながったのであろう。

ル・ボンは、自著の日本語版刊行にあたり、大日本文明協会に自筆の「自序」原稿と肖像写真を送ってきた。その前半の部分でル・ボンは最近の日本の急激な発展を激賞している。



『民族発展の心理』（1910）所載のル・ボン自筆原稿と肖像写真  
国会図書館 近代デジタルライブラリー

誰か思わん、今まで半開国民のごとく思われたる日本人が西人一切の資格と、なおその他の資格とを具有せんとは。（中略）他国民が数百年を要したる進化の行程を僅々数年のあいだに通過したること即ちこれなり、これ実に史上稀有の事象にして普通一般の進化の法則に反する所なりとす<sup>20</sup>。

ところがこれにつづいてル・ボンは冷水を浴びせかけるがごとく、こう書くのである。

しかしながらこの法則は余りに確実なるものなれば、斯くのごとき著大なる例外を容さざるもののごとし。仔細に事態を考察すれば、日本の進化なるものは深甚なるよりむしろ皮相なるを認むるに難からず<sup>21</sup>。

要するに日本の変化は「付属的性格」の変化に過ぎず、「根本的性格」は変わっていないということである。なぜル・ボンは日本にとって耳障りなことを

あえて「自序」で強調したのだろうか。本野と激論を交わしたというル・ボンは日本の知識人の考え方を知っただけに、自分の信念をはっきりと述べておきたかったのではないか。彼は削除のことは知らなかったであろうが、自分の説がきちんと伝わるかどうか、あるいは不安を感じたのかもしれない。本野の「序」とル・ボンの「自序」には、あたかも二人がパリで交わした激論の延長戦の感がある。

本野は、ル・ボンのもう一つの著作『群衆心理』は高く評価した。外交官として日露戦争の講和に努力した本野にとって、条約内容に不満な群衆が引き起こした日比谷暴動事件の衝撃は大きかったと思われる。彼は、いまや民衆が政治を動かす「群衆の時代」であることを認め、日露戦争で勝利できたのは国民の後援があったからであり、「維新の大業」もその原動力は「群衆の合同事業」であったとして、明治維新の元勳たちも実は当時の民衆世論の実現者に過ぎなかったのだと述べる。そして為政者たるものは、「社会における事業が善悪ともに群衆の力によりてなされる」という真理を忘れずに、日夜「群衆教育」を行なうことが最大の任務であるという言葉で「序」を結んでいる。

1910年に大日本文明協会が刊行した『民族発展の心理』は、ル・ボンの日本に対する言及が削除された不完全なものであった。日本人は中等人種であるという区分、また民族の根本的性格は決して変わることはないという学説を拒否した本野は、日本に関わる部分を削除して、日本の読者が自らを優等人種だと錯覚するような文言を「序」に入れた。だが彼は現代が「群衆の時代」であるというル・ボンの説に同感しており、国家の将来のために「群衆教育」が必要だと考えて、彼の著書を日本に紹介したのである。

## 5 李光洙の「民族改造論」(1922)

1922年、李光洙は『開闢』4月号に「國民生活에 對한思想의勢力—豆淸博士著<民族心理学>의一節 (國民生活に對する思想の勢力—ル・ボン博士著<民族心理学>の一節)」と題してル・ボンの『民族発展の心理』の抄訳を掲載し、その翌月号に「民族改造論」を発表した。前年、亡命先の上海からもどった李光洙は、つぎつぎと論説を発表する一方で、この年の2月には合法的な民族実力養成団体、修養同盟会を発足させていた。李光洙は第一次大戦前の大陸放浪の旅と三・一運動後の上海臨時政府での体験を通して、団結して行動できない同胞たちに絶望していた。上海で島山安昌浩の興士団思想を知った彼は、朝鮮にもどり、合法的な修養団体によって民族の性格を変えようと考えたのであ

る。「中枢階級の造成」のために修養・修学同盟が必要だと訴える「中枢階級斗社会」<sup>22</sup>、職業を芸術とみなして「愛と美により自らを改造」しようと訴える「藝術斗人生」<sup>23</sup>未来ある少年たちに向かって朝鮮の現状を知らせて同盟を呼びかける「少年예계」<sup>24</sup>など、彼がこの時期に発表した論説はすべてこの目的にそったものであった。

「民族改造論」において李光洙は、民族が長い時間をかけて行なう変化は「自然の変遷、偶然の変遷」<sup>25</sup>に過ぎず、高度な文明をもった民族は設定した目的に向かって自らを「意識的に改造」<sup>26</sup>していくと書いて、朝鮮民族が意識的な自己改造をおこなうための具体的な方策を提案している。自然の状態であれば変化にかかる長い時間を、意識的に行なうことで短縮するという発想は、彼が上海に亡命する前に東京で書いた論説「新生活論」で主張した「人為的進化」とまったく同じである<sup>27</sup>。その背後にはヨーロッパが数百年かかった近代化を、ヨーロッパに学ぶことで数十年に短縮したと自負する日本の知識人たちの考え方があった<sup>28</sup>。

早稲田大学の哲学科に学んだ李光洙は、ル・ボンの思想を学んで『民族発展の心理』を熟読し、これを上海で出会った安昌浩の興士団思想に接木させて、団体事業による民族の改造という考えに発展させたのだと思われる。この本のなかで李光洙が特に注目したのは、民族の根本的性格が変わっていく過程を記述した第4章「種族の心理的性格は如何に変化するか」で、彼が抄訳して『開闢』誌に掲載したのは、この章の第1節「国民の生活における思想の勢力」である。それによれば、ある思想が発生し、やがてそれを「宣伝する者」があらわれ、そのうちに小団体が生まれて「宣伝する者」を養成するようになり、それがある程度まで発展すると「伝染」と「模倣」の作用で伝播がはじまって、ついには「習慣」と「無意識」の領域に達して民族の根本的性格は変化するのである<sup>29</sup>。このメカニズムを意識的に行なうことによって、短時間で民族の性格を変えることができると李光洙は考えたのだろう。このころ彼は、自分が主幹する『独立新聞』に「民族改造論」の骨子ともいえる論説を18回にわたって連載しているが、これに「宣伝 改造」<sup>30</sup>というタイトルを付けたのは、生まれたばかりの興士団思想を「宣伝する者」であると自負してのことだったと思われる。

それでは、塚原と本野が問題にした2つの点、すなわち人種の階層づけにおける日本人の位置と民族の根本的性格が変わらないという点について、李光洙はどう考えていたのだろうか。まず、彼は大日本文明協会がおこなった改ざんには気づかなかつたと思われる。そして日本人は優等人種に区分されると考え

ていたことは、『無情』(1917)の主人公が「朝鮮人を、世界でもっとも文明化したすべての民族、すなわち日本民族程度の文明レベルに引き上げること(24節)」を目的としていることから明らかである。もちろん、日本人を優等人種とみなすことと、日本を素晴らしい国だと考えることは別である。彼は日本の朝鮮支配と差別に激しい怒りをいっていたが、社会進化論を真理とするかぎりは現実を認めざるを得なかった。東京で李光洙が書いた論説は、すべて社会進化論を前提としたうえで、朝鮮民族の等級を少しでも早く引き上げるためのものであった<sup>31</sup>。日本をモデルにしたのは、そのための「方便」にすぎなかったと考えられる。

つぎに、李光洙は「民族改造論」のなかで、民族の「根本的性格」が変わらないという説を受け入れている。だが、その受け入れ方は、「真理らしいです」「正しいようです」「民族性にも変えることのできない根本的な性格があるでしょう」<sup>32</sup>などという曖昧な表現によるものであり、そのうえ、朝鮮衰退の原因となった民族性がたとえ「根本的性格」であったとしても「それでもやはり改造する道はあるのです」<sup>33</sup>と書くなど、非常に恣意的である。ルボンの学説が真理であることを認めて依拠するというよりは、できあいの学説を自分の主張に利用しているという印象を受ける。朝鮮民族の「根本的性格」は何かという問いに、李光洙は、様々な歴史的な資料を根拠にしながら、それは「寛大、博愛、礼儀、廉潔、自尊、武勇、快活」であるが、それらの「半面」である「虚偽、懶惰、非社会性」が民族衰退を導いたのだとする<sup>34</sup>。朝鮮衰退の原因が結局は「根本的性格」にあるという悲観的な指摘だが、李光洙は逆に、「それゆえ、我われが改造すべきは朝鮮民族の根本的性格ではありません。ル・ボン博士のいわゆる付属的性格です。だからこそ我々の改造運動はますます可能性が豊富だと言えるのです」<sup>35</sup>と、むしろ楽天的な見通しに転回させ、つづいて団体事業によって意識的に民族の性格を変えていく方法とそれに必要な時間を提示するのである。しかしながら、『民族発展の心理』でル・ボンが書いているのは「付属的性格」ではなく「根本的性格」における変化である。一見ル・ボンの学説に依拠しているように見えながら、李光洙の論理はじつに恣意的で脈絡がない。おそらく李光洙にとっては「根本的性格」とか「付属的性格」の違いは大きな問題でなく、民族が強くなることさえできればそれでよいと考えていたのであろう。李光洙にとっては、ル・ボンの学説もやはり「方便」に過ぎなかったと思われるのである。

たとえば、ル・ボンの主張した重要な学説である「群衆」についても、李光洙は冷淡な関心しか示していない。本野一郎はル・ボンの群衆論を高く評価し、

明治維新の元勳たちといえどもその背後にある民衆の力によって動かされる存在であったという認識を示したが、李光洙は、明治維新を「歴史上に見る民族改造運動」の一例として挙げながらも、新日本建設のために働いた政治家、教育家、思想家、学者、実業家たちを明治天皇を中心とする団体の団員とみなして、民衆の力には無関心である<sup>36</sup>。そのうえ独立協会の運動が失敗した原因は「一時の群衆心理」を利用したことにあるとして<sup>37</sup>、むしろ群衆の力に対しては否定的な見解を示している。「群衆」というル・ボン思想の核心的な要素を無視したまま、学説の一部だけを恣意的に利用する李光洙の態度には、ル・ボンに対する深い理解は見いだしがたい。

李光洙は、単にル・ボンの名前に付随する「権威」を利用しようとしたに過ぎなかったのではないだろうか。ル・ボンは宣伝者が最初の小団体を作る段階において必要なものの一つとして「名声の権威」を挙げている<sup>38</sup>。自分たちの状況がまさにこの段階にあると考えていた李光洙は、ル・ボンの名声をもって、「民族改造論」に「権威」を付与しようとしたのではなかったかと考えられるのである。

## 6 まとめ

本稿では、李光洙が『民族改造論』で依拠したギュスターヴ・ル・ボンの著書『民族進化の心理学的法則』が日本でどのように受容されたか、そして、李光洙はそれとどのように向き合ったかを考察した。1900年に英訳を通してこの書の解説を書いた東京大学大学院生塚本政次は、ル・ボンの思想を学問的な姿勢で忠実に紹介し、納得できない部分、とりわけ日本への言及について反論した。1910年に大日本文明協会から出た原典からの翻訳では、日本に関する部分が削除されていた。この本の刊行を大日本文明協会に勧めたロシア大使本野一郎はル・ボンの『群衆心理』の信奉者であったが、ル・ボンによる日本の人種区分と「根本的性格の不変」についての説に承服していなかった。外交官である彼は、日露戦争にかろうじて勝利したばかりの日本国民から自信を喪失させるような文言を忌避したのである。

1918年の大日本文明協会再版縮約本でル・ボンを読んだ李光洙は、とくに反論せずにその学説を受容したが、受容の仕方は恣意的で曖昧であって、「民族改造論」に権威を与えるためにル・ボンの名声を利用したに過ぎないという疑いを抱かせる。彼にとっては日本をモデルにすることもル・ボンの学説も、自民族を強くさせるための「方便」ではなかったかと思われるのである。

注

- 1 李光洙が実際に読んだのは、後述する1918年刊行の合本縮刷版だったと推定されるが、内容は1910年版と変わっていない。
- 2 ギュスターヴ・ル・ボンの思想と経歴については以下を参照した。
  - ① 本野一郎「序」『民族心理学及群衆心理 全』大日本文明協会1915
  - ② 桜井成夫訳『群衆心理』訳者のあとがき 講談社学術文庫 1993
  - ③ 波田野節子『李光洙・《無情》の研究』白帝社 2008 288-291頁
  - ④ [http://fr.wikipedia.org/wiki/Gustave\\_Le\\_Bon](http://fr.wikipedia.org/wiki/Gustave_Le_Bon) 最終閲覧日2010/5/7
  - ⑤ [http://en.wikipedia.org/wiki/Gustave\\_Le\\_Bon](http://en.wikipedia.org/wiki/Gustave_Le_Bon) 最終閲覧日2010/5/7
- 3 国会図書館近代デジタルライブラリーからダウンロードした。  
<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/759857>
- 4 塚原政次に関しては以下を参照。サトウタツヤ 講演録「近代日本における心理学の受容と制度化」『立命館人間科学研究』第5号 2003.3 250-1頁／佐藤達哉「明治期の心理学と「教育」の心理学: 元良勇次郎と塚原政次の興味関心から」『第6回日本教育心理学会総会発表論文集』1997.9
- 5 英訳本はAmerican Libraryからダウンロードした。  
<http://www.archive.org/details/psychologyofpeop00leborich>
- 6 『心理学書解説 ルボン氏民族心理学』8頁。なお、塚原は米国の雑誌『心理評論』の臨時増刊号目録を調べて、翻訳者が「アール、テレチュブ」氏であることを明らかにしている。同上9頁
- 7 同上104-5頁
- 8 同上34-5頁
- 9 同上108頁
- 10 同上109-10頁。参考までに問題にされている箇所の拙訳を載せておく。翻訳を手伝ってくださった京都大学の西山教行氏に、この場を借りて感謝の意を表す。なお、これは本文でなく註であり、後述するように大日本文明協会本でも訳されていない部分である。ル・ボンの原典は下記からダウンロードした。  
[http://classiques.uqac.ca/classiques/le\\_bon\\_gustave/lois\\_psychologie/le\\_bon\\_lois\\_psychologie.pdf](http://classiques.uqac.ca/classiques/le_bon_gustave/lois_psychologie/le_bon_lois_psychologie.pdf)  
「日本のケースについてはすでに他の場所で触れているし、きっとそのうちにまた触れることになるだろうから、ここでは触れないでおく。著名な政治家たちと、それにつづいて見識にかけた哲学者たちがあれほど錯覚している問題を数頁で論じることなど不可能である。軍事的勝利の名声というものは、単なる蛮行によって得られものであるにもかかわらず、いまだに多くの人々にとって文明をはかる唯一の基準となっている。黒人の軍隊をヨーロッパ式に調教し、彼らに銃や大砲のあやつり方を教えることはできるが、それによって彼らの精神的劣位とその劣位に由来するすべてのことを変えたことにはならない。日本が現在まもっているヨーロッパ文明の輝く衣装は、種族の精神的状態にまったく対応していない。みすほらしい借り着であって、やがては激烈な革命によってずたずたになることだろう」(原典p.61註7)
- 11 しかしながら、半世紀後の日本では革命こそ起きなかったが、速すぎた近代化の揺り返しを受けたがごとく「激烈な」敗戦によって「破壊」された。この事実を思うと、ル・ボンの言葉は不思議な重みを感じさせる。
- 12 編集局の「例言」には、この書にはまだ英訳本がないと書かれているが、塚原の解説書を読んでもいけば英訳本があることがわかったはずである。育成会の心理学書解説叢書は研究者向けだったため、編集局はその存在を知らなかったのだろう。だが、日本語版に自序をよせているル・ボンが英訳本の存在を知らなかったことは不思議である。あるいは英訳本には著作権上の問題があったのかもしれない。
- 13 こちらは英語からの重訳で、訳者は早稲田教員をしていた大山郁夫だった。「例言に代へて」『群衆心理』大日本文明協会 1910.12
- 14 「例言」『民族発展の心理』大日本文明協会 1910.7 1頁  
『民族発展の心理』は国会図書館の近代デジタルライブラリーからダウンロードした。  
<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/759849>
- 15 「民族改造論」には「民族心理学 第二章第一節」と引用の出典が明示されているが、章立てが「章・節」になったのは1918年の合本縮刷版からである。その前は「篇・章」だった。南

## 李光洙の『民族改造論』とギュスターヴ・ル・ボンの『民族進化の心理学的法則』

- 富嶺『近代日本と朝鮮人像の形成』第4章 李光洙の「民族改造論」と朝鮮民族性 註（勉誠出版2002 204頁）の指摘による。
- 16 『大正人名辞典』東洋新報社1917復刻版 日本図書センター 1987 57頁
  - 17 本野がロシアから送った「序」は、1910年7月の『民族発展の心理』にも12月の『群衆心理』にも間に合わず、結局1915年の合本に掲載された。（「例言」『民族発展の心理』、「例言に代へて」『群衆心理』）
  - 18 『民族心理及群衆心理 全』「序」9頁
  - 19 同上 10頁
  - 20 ギュスターヴ・ル・ボン『民族発展の心理学』「自序」1-2頁。なお編集長の浮田和民は、ヨーロッパの400年の自然進化の過程を日本は人工的に40年に短縮したと自著（浮田和民『社会学講義』帝国教育会 1901）に書いている。ル・ボンのこの文章には満足したことだろう。波田野節子『李光洙《無情》の研究』白帝社 2008 57-58頁を参照
  - 21 『民族発展の心理学』「自序」1-2頁
  - 22 『開闢』1921年7月号
  - 23 『開闢』1922年1月号
  - 24 『開闢』1921年11月～1922年3月号。最終回の末尾には、論説を読んで少年同盟に興味をもった人は筆者に連絡を乞うという「謹告」が載っている。
  - 25 『開闢』1922年5月号 20頁／『李光洙全集』第10巻 又新社 1979 117頁
  - 26 同上
  - 27 「新生活論」二、意識的變化斗無意識的變化
  - 28 註20を参照
  - 29 ル・ボンは『群衆心理』で、集団の考えと行動が同一方向へとなびく過程を「暗示—感染—模倣」としている。
  - 30 1919年8月21日～10月28日『独立新聞』 金源模『春園光復論 独立新聞』 檀国大学校出版部 2009 681～715頁。なお同じ年に安昌浩が「改造」というタイトルで演説をしているが、そこには進化論的発想やル・ボンの学説とのかかわりは見られない。安昌浩と李光洙の考え方の比較は今後の研究課題である。
  - 31 このような意識は、たとえば1916年の『學之光』11号に発表された論説「為先獸가 되고 然後 人이 되라」などに明らかである。
  - 32 『開闢』1922年5月号 39頁／『李光洙全集』第10巻 又新社 1979 128頁  
‘眞理인 듯합니다.’ ‘옳은 듯합니다.’ ‘民族性에도 變할 수 없는 根本的 性格이 있을 것입니다.’
  - 33 『開闢』1922年5月号 40頁／『李光洙全集』第10巻 又新社 1979 128頁  
‘그러나 亦是 改造할 길이 있습니다.’
  - 34 『開闢』1922年5月号 45頁／『李光洙全集』第10巻 又新社 1979 131頁
  - 35 『開闢』1922年5月号 45-46頁／『李光洙全集』第10巻 又新社 1979 131頁
  - 36 『開闢』1922年5月号 25頁／『李光洙全集』第10巻 又新社 1979 120頁
  - 37 『開闢』1922年5月号 28頁／『李光洙全集』第10巻 又新社 1979 121頁
  - 38 『開闢』1922年4月号／『李光洙全集』第10巻 178頁

## 参考文献

小熊英二『＜日本人＞の境界』新曜社 1998